

# 水泳の体力医学的研究(5) 性格について

日比野朔郎

Studies on swimming from the view point of physical fitness, Report 5.  
Concerning the character.

SAKURO HIBINO

## I ま え が き

京都府立大学では、体育講座の念願であつた水泳実習がようやく実を結んで、「泳げないまま卒業する学生をなくしたい」ということを目指し昭和40年に課外 sports として第一回水泳教室が夏期休暇中に行なわれる運びとなつた。

水泳教室実施についての事前調査の一つとして、また表題のように、おのおの観点から総合的に研究する意図をもつて実施してきた体力医学的研究の医学的測定結果を検討するにあつて、人文・社会科学研究の面からの寄与も必要であるので、医学的領域を越え personality の側面からの調査を行なつた。以上二つの考えから総合的研究の利点をより効果あらしめるように、水泳の好きな者、泳げない者と泳ぎのできる者という三群に分類して personality の分析をすることにした。

体育の目標の一つに望ましい社会的性格の育成ということがあげられています。しかしどのように、いかなる性格が育成されてゆくかについての解答ははまだ明らかではないと思われまふ。

性格の分析研究で、運動種目によつて性格特性に差異があることを明らかにされていますが、それが運動種目自体によるものであるか、運動部集団による差異であるのか、または、その運動部に所属する以前にすでにもつていたものであるか、すなわち、その運動を好む母集団から入部してゆくのであろうか、など運動経験内容の差によつて生じたものかというような問題があります。今回はそれらの疑点を問題としないこととする。

フラナガンは、sports 種目撰択の場を利用して性格が sports 種目を決定する因子の一つであることを見出している点から、水泳を好む者を、とくに分類してあげ、いまだ泳ぎえない者を泳ぎうる者とともに浮きあがらせるため比較対象の group とした。

## II 調査方法

調査日 昭和37年9月から38年10月まで2ヶ年間に2回の調査を実施した。

対象 京都府立大学学生(1~4回生)計1150名(男子, 507名, 女子, 643名)。

調査 1. 矢田部 Guilford 性格検査, 2. sports 種目の好嫌撰択(自由撰択を原則として実際に行う場合の好きな sports と嫌いな sports を撰択させた。) 3. sports 種目名調査(自由撰択の基盤としてどれ程の sports を知っているであろうかの調査) 4. 水泳能力・泳ぎえない者の調査。

整理方法 調査1は所定の手続を経て整理した, 調査2は水泳の好きな者を抽出した。調査4はいまだ25m以上泳ぎえない者を未泳者として集計整理した。

水泳を実際に行う場合水泳を好む者を好泳者、いまだ泳ぎえない者を未泳者と泳ぎうる者を可泳者と呼ぶことにする。

## III 調査結果と考察

### a. 2ヶ年間の種目撰択の変化

		同一	変化	その他
男 子	好	45.8%	32.8	21.4
	嫌	37.4	32.8	29.8
女 子	好	55.9	39.3	4.7
	嫌	35.7	54.8	8.5

1年目と2年目との撰択種目の変化内容を好嫌別にみるとかなり撰択は固定しているように見うけられる。とくに女子の好きな種目の固定率は高く56%である。男子でも46%となつている。嫌いな種目にあつても男・女とも36%は固定している。

### b. 知っている sports 種目の数

sports 種目撰択の際、どれ程の sports 種目を知つて

いるであろうか、すなわち、どれだけの母集団から撰択をしているのであろうか。男子は11種目から52種目にわたり平均35種目の中から撰択をしている。一方、女子は5種目から40種目にわたり平均22種目の中から撰択をしている。そして知られている頻度順による種目名は、男子では Baseball, Soccer, Basketball, Tennis と Volleyball で、同様に女子は Baseball, Tennis, Volleyball, Table-tennis と Basketball であつて、男女とも水泳を10位内に上げていた。

c. 未泳者の数

未泳者の判定を明確にするため pool の一端の長さ25mを指標として、25m以上泳ぎうる者とそうでない者とに区分した、その結果、男子未泳者は13.4%であつて女子のそれは、49.7%であつた。

d. 未泳者の問題

未泳者は男・女ともに30~32%の者が泳ぎが出来るようになることの必要性を認めている。また約20%の者が出来るならば泳ぎうようになりたいと望んでいる。可泳者より10%少ない男子65%, 女子71%の者の家の近くには泳ぎが出来る川・海や pool などの場所があつたことがわかつた。

また、過去に水泳指導の機会がなかつた未泳者は45~55%あつたが、指導をうけた者の男子63%, 女子79%の者は可泳者となつている。その可泳者になつた年齢は男女ともに75%が12才までで、残りの約20%の者は13~15才のいわゆる中学校時代であつた。

可泳者の出来る泳法は、男子の70%の者が2, 3の泳法を自由に実施できる。一方女子は平泳ぎが大部分で74%, 自由型は15%, 両泳法が出来る者は数える程しかない、飛込も男子の45%の者が出来るに対し女子は僅か15%であることがわかつた。

未泳者についてよく問題となることは、環境的条件か精神的条件かということであるが、前者は後者に比較し障害となつていてと考えられてきた。そうだとすれば未泳者の personality を検査することは、環境的条件の影響が大きくて無意味であると推論される。しかし未泳者の50%の者が可泳者となる必要性を感じている上に、大学生であるから泳ぐという意志さえもてば、pool の設置数も増大した今日では環境的条件もかなり緩和されるのではなかろうか。

過去に泳ぎの場所に恵まれない者は、僅か10%の者でしかなかつたこと、指導の機会では50%の者が受けられなかつたこととで、可泳者との環境的条件すなわち水泳の機会、指導、場所の環境的三条件において未泳者がとくに不利であつたとは考えられない。このようなことから精神的条件の彼ら自身の personality によつて左、右さ

れているのではなかろうか、この点は一方泳げない理由のなかに、女子で「なんとなく」とはつきりした理由をあげなかつた者、「水がこわい」という者、男・女ともに「泳げないことを知られたくない」という者があつたことからもうなづける。

e. 矢田部・Guilford性格検査 (Y-G test)

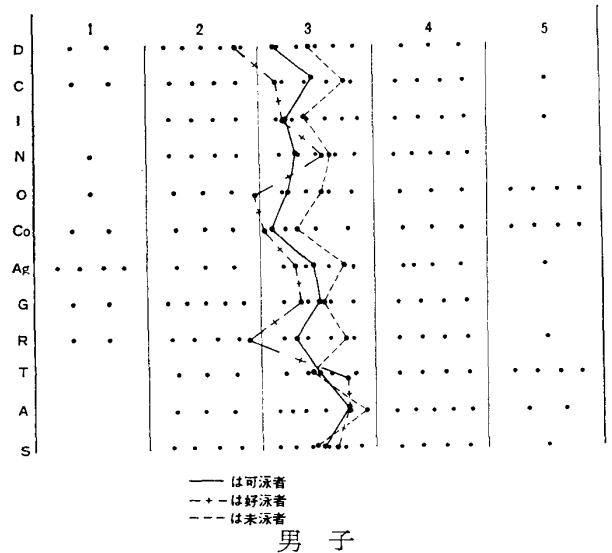


図1 矢田部ギルフォード性格検査プロフィール

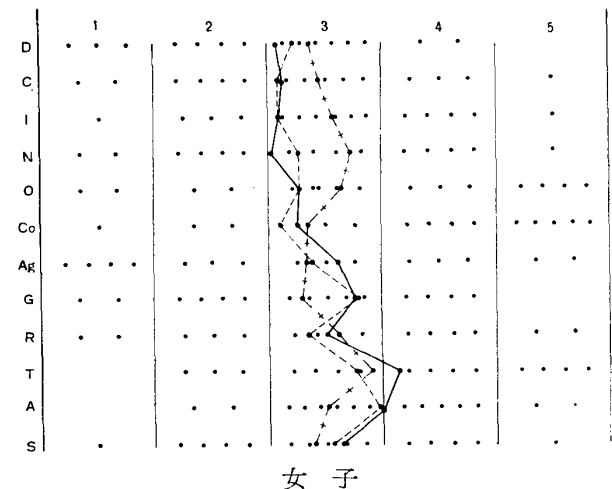


図2 矢田部ギルフォード性格検査プロフィール

テストの概要を示すと、この検査は12の人格特徴を測定する尺度から成り立っていて、その特徴に10問、計120問の質問がある。12の特徴は

D ; 抑うつ性 (Depression) 悲観的性質、また罪の意識を抱きやすい傾向を示し、得点が高いと抑うつ性が大きい。

C ; 回帰性傾向 (Cyclic tendency) 著しい気分の変化、情緒の不安定性を示す。

I ; 劣等感の強いこと (Inferiority feeling) 自信の欠乏、自己の過小評価の傾向を示し、得点が高い程劣等感が大。

N；神経質 (Nervousness) Neurosis 気味, 心配性など神経質的傾向を示す。

O；客観性がないこと (lack of Objectivity) 主観的過敏性, 空想性を示す。高い得点ほど主観的である。

Co；協調性がないこと (lack of Cooperativeness) 不満が多い, 人を信用しない性質を示し, 高い得点は非協調的である。

Ag；愛想がないこと (lack of Agreeableness) 気が短いなど攻撃的性質, 社会的活動性を示す, 攻撃的ほど高い点である。

G；一般的活動性 (General activity) 体を動かすことが好きな活潑な性質, 活動的ほど高い得点である。

R；のんきさ (rhythymia) 気軽な, のんきな性質を示す。

T；思考的内向 (Thinking introversion) 思索的反省的傾向の強さを示す。得点の低い程思考的外向で反省的でない。

A；支配的でないこと (Ascendance) 社会的指導性で, 反対は服従的で指導性のないことを示す。得点の低い程支配性が大である。

S；社会的内向 (Social introversion) 社会的接触をさける傾向を測定するもので, 得点が低い程社会的外向である。

また profile は5類型

1. 平均型 左, 右の偏りなく平均, 調和的。臨床的には問題が少ない型。2. 右寄り型 反社会的行動をとりやすい。3. 左寄り型 安定消極型。4. 右下り型 もつとも社会的適応がうまくいく人格の者。5. 左下り型 neurosis になりやすい型。に区分され, 判定される。

未泳者 (男子22名, 女子23名), 可泳者 (男子22名, 女子23名), と好泳者 (男子11名, 女子23名) の三群にわけて検討することとする。

未泳者, 可泳者と好泳者の三群の profile は図1・2に示した。全体的傾向を診断するための profil は男・女ともまた三群ともに, 全く平均的な状態を示して調和的な型である平均型を示していることがわかった。

未泳者と対照群としての可泳者と比較してみた結果の両群の profile は, 男子を図1に, 女子を図2に示した, また両群の平均値の差の検定結果は, 男子を表1・Aに女子を表2・Aに示した。男子には未泳者と可泳者とは全く有意差が認められなかったが, 女子には (I)・(N)・(G)・(A) の人格特徴に有意差が認められた。(I) と (N) は劣等感が大きく, 神経質である。すなわち, 情緒的不安定であり, (G) は身体を動かすことを好まない活動性がないことで, (A) は服従的であるという人格特徴である。

つぎに同じような方法で未泳者と好泳者を対照群とし

表 1 A

特徴	項目	未泳者(A)		可泳者(B)		(A)-(B)	t	P
		M	S.D.	M	S.D.			
D		7.86	5.5	9.95	5.0	-2.09	0.402	none
C		8.91	3.7	10.18	4.8	-1.27	0.964	none
I		7.22	5.4	7.41	5.5	-0.19	0.068	none
N		10.13	4.3	8.91	5.5	1.22	0.788	none
O		5.95	3.9	7.14	4.3	-1.19	0.948	none
Co		7.27	4.0	7.50	3.8	-0.23	0.192	none
Ag		10.50	3.5	11.18	2.9	-0.68	0.689	none
G		10.95	5.3	11.81	4.8	-0.86	0.566	none
R		7.36	4.2	9.64	4.6	-2.28	1.692	none
T		11.27	4.8	11.50	3.6	-0.23	0.177	none
A		10.86	4.2	9.72	4.8	1.14	0.930	none
S		10.00	4.3	10.18	3.8	-0.18	0.145	none

B

特徴	項目	未泳者(A)		好泳者(B)		(A)-(B)	t	P
		M	S.D.	M	S.D.			
D		7.86	5.5	11.63	5.8	-3.77	1.762	none
C		8.91	3.7	11.72	3.3	-2.81	0.780	none
I		7.22	5.4	8.90	4.4	-1.68	0.871	none
N		10.13	4.3	10.90	4.4	-0.77	0.459	none
O		5.95	3.9	8.73	4.5	-2.78	1.787	none
Co		7.27	4.0	8.27	4.6	-1.00	0.626	none
Ag		10.50	3.5	12.64	3.3	-2.14	1.600	none
G		10.95	5.3	11.54	3.0	-0.59	0.340	none
R		7.36	4.2	11.72	4.3	-4.36	2.701	0.01
T		11.27	4.8	12.90	3.6	-1.63	0.971	none
A		10.86	4.2	9.36	3.2	-1.50	1.016	none
S		10.00	4.3	10.45	3.3	-0.45	0.298	none

表 2 A

特徴	項目	未泳者(A)		可泳者(B)		(A)-(B)	t	P
		M	S.D.	M	S.D.			
D		11.69	4.8	9.39	4.5	2.30	1.266	none
C		10.91	4.6	8.83	4.3	2.08	1.464	none
I		9.91	4.3	6.83	3.6	3.03	2.710	0.01
N		11.69	5.0	8.04	4.4	3.65	2.533	0.02
O		9.09	3.0	7.43	3.9	1.66	1.560	none
Co		6.56	3.7	6.00	4.4	0.56	0.450	none
Ag		10.34	4.1	11.38	3.2	-1.04	0.961	none
G		9.90	3.8	12.35	3.4	-2.45	2.221	0.04
R		10.00	4.2	9.61	4.9	0.39	0.278	none
T		10.48	3.8	9.17	3.2	1.31	1.219	none
A		12.13	4.4	9.09	4.2	3.04	2.311	0.02
S		10.65	3.2	9.69	3.0	0.96	1.013	none

## B

特徴	項目	B				(A)-(B)	t	P
		未泳者(A)		好泳者(B)				
		M	S.D.	M	S.D.			
D	11.69	4.8	10.74	3.9	0.95	0.710	none	
C	10.91	4.6	8.74	3.9	2.17	1.662	none	
I	9.91	4.3	6.74	3.3	3.17	2.709	0.01	
N	11.69	5.0	9.26	4.0	2.43	1.754	none	
O	9.09	3.0	7.09	3.9	2.00	1.879	0.05	
Co	6.56	3.7	5.43	3.3	1.13	1.054	none	
Ag	10.34	4.1	10.61	3.3	-0.27	0.237	none	
G	9.90	3.8	12.61	3.5	-2.71	2.424	0.02	
R	10.00	4.2	8.65	4.4	1.35	1.026	none	
T	10.48	3.8	11.09	3.9	-0.61	0.517	none	
A	12.13	4.4	9.00	3.8	3.13	2.488	0.02	
S	10.65	3.2	9.65	4.0	1.00	0.903	none	

て比較した結果、両群の profil は男子を図1に、女子を図2に示した。また両群の平均値の差の検定結果は男子を表1・Bに、女子を表2・Bに示した。

男子は可泳者との比較とは異なつて、(R)の人格特徴すなわち、のんきさ・活潑性に有意差が認められた。

女子は可泳者との比較と同じように(I)・(G)・(A)の人格特徴は有意差が認められた。ほかに(N)に代つて(O)に有意差が認められた。

これらのことから男子には精神的条件も環境的条件も大きな影響がないように考えられる。大学生になつてからでも適切な実技指導をえたならば、また小学生時代までなら自からの力で可泳者をなりうるのではなからうか。

女子は環境的条件がかなりよくなつたとはいえ、精神的条件で活潑さがなく、服従的な態度の上に神経質で、泳ぎに対して全く自信を失つていゝのではなからうか。この精神的条件を克服するための指導がなされたその上で実習が必要となつてくると考えられる。

## IV 総 括

水泳の体力医学的研究に人文・社会科学的側面からの寄与を重視して、総合的研究のより高い効果を狙い未泳者、可泳者と好泳者の三群の personality 分析調査を行なつた。その結果を要約すると

1. 本学における未泳者は男子13.4%、女子は49.7%であつた。

2. 未泳者の50%の者が可泳者になりたいとの希望をもつている。水泳の場所、指導者や機会において可泳者との間に環境的条件の差異はないようである。

しかし12才までにほとんど可泳者になつてゐる点、水泳指導の機会が小・中学校時代が適當である。

3. 未泳者の障害を環境的条件を精神的条件とに大別すると、男子には環境的条件も大きな障害としての影響はない。女子には前者よりも後者の条件がかなり影響している。

4. 女子において未泳者と可泳者・好泳者との Y-G test による平均値の差の検定によつて有意差が認められた。未泳者の personality の特徴は Inferiority, feeling, Nerorusrness, lack of objectivity, General activity, Ascendance, の5特徴である。すなわち、情緒的不安定とくに劣等感が大きく、神経質であつて、水泳に自信が全くなく、また活潑さがみられず服従的である。

以上の4点が考えられる。今後この personality の分析研究をいかに水泳の体力医学的研究に結びつけて総合的研究の効果をより一層あげてゆくかを考えなければならぬ。

## V 文 献

L. Flanagan; A Study of Some Personality Tracts of Different Physical Activity Groups. Reserach quaterly 22, 1951.

矢田部達郎, 他; 矢田部・Guilford 性格検査手引.

日比野朔郎; Sports 種目の好みと性格特性について(II)

關西教育学会第17回大会 昭和39年発表